



《宣教メッセージ》

共同体の成長を夢見て



主教 アンデレ 大畑 喜道

日本酒醸造をする家では決して食べないものをご存知でしょうか。朝定番の納豆は決して食べないのだそうです。もしも醸造所に納豆菌が持ち込まれると、大切な日本酒を醗酵させる酵母を食べつくしてしまうからだそうです。(誤解されてしまうといけません、納豆菌が悪いということではありません。) 本当に必要なものを成長させるためには絶対に守らなければならないうことがあろうということですね。「神の国はパン種に似ている。3サトンの粉に混ぜると、やがて全体がふくれる。(ルカ13・21)」キリストの命が私たちの間に息づいているから、やがて醗酵し、すべての生地を変えていくだけの力があるということをイエスは

語っておられます。しかし実際には、この世界の大きな流れは私たちを押しつぶそうとしています。自分の利益を優先させるために知らず知らずのうちに嘘の情報が蔓延し、希望を失う人々があふれます。金に心が奪われて真実が見えなくなってしまうこともあります。一人で何ができるのだろうかという勇気を失うこともあります。悪魔の種は違ったものを成長させようと見えない力で縛り付けているかのようです。教会共同体は悪魔の種が入り込まないように、一人一人を守っていく責任があります。一人一人のいのちを育んでいく巣を作る責任があります。そうでないと

もない方向に向かってしまうかも知れません。

突然話は変わりますが、皆さんもお祈りしてくださいと思います。今年は管区主催で宣教協議会が開催されました。前回の協議会と違って、私は皆さんが多くの関心を寄せ、祈りのうちに霊的な



2012年9月宣教協議会で (右は五十嵐九州教区主教)

参加をしてくださったことを感じています。時には私たちは教会がこれからどうしたらよいのか閉塞感に襲われます。私たちは決して諦めては

いけません。それぞれが生かされていることの意味を深く見つめ、信仰の確信をしっかりと持って、神の国の完成に向かい、日々溢れ出る喜びをもって生きていきたいと思えます。(その過程には辛い事もあるでしょうが。) 協議会を支えてくれた青年たちから、自分たちの提言を作りたいという話が出ました。私はとても嬉しく思いました。自分たちの言葉で、自分の生きてきた言葉に翻訳し直す作業ができていたらどんなに素晴らしいことか。神様は確実に種を蒔かれているのを感じました。全教会が平均化はできません。各教会の最重要、最優先課題を明確にしましょう。神様は私たちと共に歩んでくださり力づけてくださっていることを信じて進んで参りましょう。来年は教区成立90周年の年です。今から自分たちの教会共同体がどのように成長していくかを夢見ていきましょう。

み恵みの「合同子どもキャンプ」

キャンプ長 司祭 高橋顕

去る8月10日から12日までの2泊3日、東京教区日曜学校連絡会の主催による「合同子どもキャンプ」が清里のキープ・フォレストスターズキャンプ場で行われました。子ども33名、スタッフ・保護者23名の総勢56名による「子どもキャンプ」でした。東京教区の12の教会と東日本大震災被災者支援団体から参加者が集い、「あそぼう、みつけよう、清里の森で」というテーマのもと、参加者同士が教会という大きな家族のものと、交流と絆を深めた有意義なキャンプでした。

2012夏のキャンプ特集

キャンプは、「教会に連なる子ども達が各教会のワケを越えて多くの友達に出会ってほしい」「祈りと協力の共同体としてのキャンプで仲間と自然の素晴らしさに出会ってほしい」という願いのもと、2年前より構想が立ち上がっていました。しかしその後、東日本大震災が起こり、社会や生活のあり様や環境が変わり、団体行事やイベントのあり方もこれまで以上に慎重に

ならざるを得ず、日曜学校連絡会では



日ごろの活動を進めながら、キャンプ開催の情報収集や準備に取り組んできました。「合同子どもキャンプ」が安全に楽しく、有意義に実現できま

たことは、教区「信仰と生活委員会」、各教会の皆様、日曜学校連絡会の活動をお支え下さっている方々のご加勢、ご支援、ご協力によるものと、心より感謝申し上げます。

キャンプの計画段階の当初は、参加者の対象を小学生の児童だけと考えておりましたが、このキャンプへの要望やニーズの状況により、参加対象者を未就学児から中学生までとし、保護者の参加も可、としました。このキャンプでは、この状況のもと、結果的には安全で有意義なキャンプが行えたと充実感に満たされております。子どもは大人によってのみ教育され成長してい

くのではなく、子どもは年齢の異なる子ども達同士がいる仲間の中にあっても大きく学び、成長していきます。まさにこの素晴らしさがはつきりと知らされた3日間でした。キャンプの終わり頃、子ども達が言いました。「わたし、あの子とお友達になったの。」「ぼく、一生懸命、神さまにお祈りしたよ。」「ぼく、友達を手伝ったよ。」「わたし、もっとキャンプにいたい。」大人とスタッフに見守られながらも、子ども達が神さまとキャンプをつくり上げていました。神さまのみ恵みに感謝いたします。

◇ ◇ ◇

「中高生キャンプ」8月13・16日

WAKUWAKU キャンプ

新妻夏奈(中3)

キャンプのテーマは、WAKUWAKU。テーマにちなんだプログラムを通して色々なWAKUWAKUに出会いました。例えば、2日目のプログラム「沸(わく)く」では運動会、3日目の「和喰(わく)く」では森で自然の箸作り。その中でも私が一番に残ったプログラムは3日目の「WAKUWAKU」です。このプログラムでは2つのグループに分かれて「わくわく」とは何かを話し合い、その結果を大きな模造紙に絵で表しました。話した内容をみんなで一つの絵に仕上げた時の大きな達成感は、すば



しい絆を作りに参加します。

貴重な体験

田中萌実(高一)

はじめにこのキャンプに参加させていただきお恵みをお与えくださった神

様と皆様に感謝いたします。初めてのようなキャンプに参加しましたが、本当に多くの大切な学びが与えられ楽しい4日間でした。ありがとうございます。

清泉寮がある清里高原のふもとに差しかったとき、車窓から碑が見えました。そこには、「やまべにむかいてわれめをあぐわがたすけはいずかたよりきたるか」(詩編121編)という言葉が刻まれていました。夏の青々とした木々、遠くに連なる山々の壮大なエネルギーを感じながら目にするこの言葉は、並々ならぬ力を持つてストリートに心の中に入ってきたように思っています。

キャンプでは朝晩のお祈りの時をもち、様々な自然体験やゲームをして素敵な時間を過ごせました。皆で意見を出し合っ

目の前にいる友達、自分たちの周りの木々や小鳥や空、すべてのものの中に神さまがおられるということを覚えてこれから出会うものを大切にしていきたいと思います。

◇ ◇ ◇

青年大会に参加して

浅草聖ヨハネ教会

ドルカス 下条 あすか

8月23・26日に仙台で行われた日本聖公会全国青年大会に参加しました。参加者約80人のうち、青年は約60人でした。全国の教区と、大韓聖公会大田教区からも参加者があり、東京教区からは8名の青年が参加しました。4日間に行われたプログラムをご紹介します。

1日目、夕方からの開会礼拝の後、加藤博道主教から一言お話をいただき、いっしょに歩こう！プロジェクトスタッフの池住圭さんからプロジェクトの活動方針やどのような気持ちで活動しているかということについてお話をうかがいました。また、「東北ヘルプ」の事務局長を務めておられる日本キリスト教団の川上直哉牧師から東北ヘルプの活動やこれから教会がすべきことなどについてのお話をうかがいま

した。2日目は「それぞれの3月11日を振



した。東京教区は、教区や有志団体の主催で行われている夏の中高生キャンプについて話をしました。

3日目は朝から3つのコースに分かれて、被災地めぐりをしました。行った場所は「石巻市」、「南三陸町志

り返って」というテーマでグループに分かれて話し合い、また全体で分かち合いをしました。午後は、越山健蔵司祭から原発事故についての講演をうかがいました。その後、それまでのプログラムを振り返って少人数グループで意見をわちあ

い、グループ毎に紙にまとめて広間に掲示しました。夜は懇親会です、それぞれの教区の青年活動の紹介をしま

した。この大会に参加して、「東日本大震災はまだおわっていない」ということがわかりました。まだまだ大変な生活を送っている人たち、支援活動をしている人たちのことを憶えつづけ、自分たちにできることをしていきたいです。

司祭と語ろう（その４）

司祭 石坂みゑ子

今回は広報委員の前島 恵が、聖バルナバ教会の牧師館で話を伺いました。お話に入る前に驚きと共に喜ばせて下さったのは、お菓子と共に供された薄茶でした。一服にとどまらず、お代わりまで頂戴してしまいました

― 先ず教会に行かれるようになったきっかけから伺いたいのですが。



石坂 家族はいわゆる敬虔

な信徒ではなかったのですが、教会へは時々行っていました。父や母、姉も、特定の教派に属するわけでもなく、家族全員で揃って行くわけでもなく、たぶん各々の都合に合わせて通っていたのだろーと思ひます。姉に連れられて、他教派の礼拝に出席した記憶もあります。気がついたときには、小学校の高学年で、聖公会の教会に行っていました。でも子どもの礼拝：シール貼りや紙芝居や楽しいお話：に興味がわきませんでした。そ

れでいわゆる大人の主日の聖餐式に出席していました。全く意味もわからずに。

祈禱書に分冊など無かった頃ですから、聖歌集付きの分厚い祈禱書と聖書を抱えて、礼拝の箇所を探しているうちに、聖餐式が終わってしまうので、何故こんな面倒な！と思ひつつでも何故か通っていました。誰からも強要されませんでしたので、勝手気ままに行きたい時に行っていたと云う風です。

― 幼い頃から宗教心は個人の自由という環境だったのでしょうか。

石坂 祖父母も一緒に住んでいて、お仏壇がありまして、お花やお線香をあげていました。そのことと、キリスト教は、わたしにとって全然矛盾しないのです。矛盾がある人に矛盾がないといつても通じるわけもないのですが。

大きくなつてから友人と教団へ行ったこともありすが、聖公会の素晴らしさは、司式者と会衆の応答にあると感じました。聖餐式では、自分の意思で前へ出ていつて聖餐に与る：そ

れが良いナーと思ひました。

― 神学院に入学するまでの経緯についてはいかがでしょう。

石坂 人に話すとき長くなるし、言葉にすると真実味に欠けるので、お伝えするのが難しいのですが、日々の生活の中で起こった様々な出会いと出来事、情報の話し手と受け手との間に生じた思い違い（笑ひ）の積み重ねの結果としての、お導きであつたと思ひます。どこからも反対がなかつたことに、とても感謝しています。

― 子どもの頃の思ひ出を聞かせて下さい。

石坂 長野の善光寺あたりに住んでいた頃の記憶に、学校の帰り道、空いっぱいトンボが飛んでいて、指先に勝手に止まるんです。ひよいひよいと両手指にはさんで、また空へ放して遊んでいました。後から記憶違いかも知れないと思ひていましたら、養老孟司さんの本にも同じようなことが書かれていて「トンボが顔に当たつてきた」と。蝶々は粉が落ちるので嫌でしたが、トンボは大丈夫でした。神学校へ入るまでは、お茶の

稽古をしながら、多少教えたりもしていました。きっかけは高校での学校茶道で、先生のお誘いに甘えて、ご自宅へもおけいこに通ひました。その後、北関東、東京などの転勤先でも、いろいろな先生の手ほどきを受けました。ずいぶんと前になりましたが、師範仲間と５人での花月のお稽古は、本当に楽しひでした。同時に必死にしたことは、

着物の着付けでした。初めは一日がかりだったのが、最後は15分くらいで着られるようになりました。

当時は全く考えたこともありませんでしたが、今になれば、聖餐式とお茶の点前の共通点に、感じ入るばかりです。ですが、それを他の人に伝えるのは、なかなか難しいことです。両方を体験してみても、初めて自分で納得することができるのかもしれません。過去のどんな経験も、無駄にはならなかつたと、しみじみ思ひつています。

― 牧師にならなかつたら何をされていたでしょうか？

石坂 何ともわかりませんが、お茶のお稽古をしているかも。

― 聖餐式の中の説教で心がけている点はいかがでしょう。

石坂 なるべくテキストに沿いたいということ、自分が出来ない道徳訓みたいなことは言わないようにしようと。こうすればこうなりますよといった因果応報の神さまではないということ。誰でも、知識や知恵や思ひ



込みが重なると、あたかも自分が神のような錯覚に陥りがち。これだけは避けなきゃねということ。お話は、短ひに越したことはない（？）

― 最後に、今の世の中で牧師に求められていることの中で、したいことあるいは必要と思ひ事をお聞かせください。

石坂 お伝えし難ひのですが、

「司祭のこの一冊」

『人生の四季』

（ポール・トゥルニエ著）

日本キリスト教団出版局
2011年再版発行

司祭 井口 諭

著者トゥルニエ（1889～1986）は、スイスの医師・精神療法家です。「人生の四季」は、講演記録に加筆されて1967年に出版、日本語版は70年に出版、以来読み続けられ2007年に再び発行されました。



人生の過程を春夏秋冬の四季に区切つて、「キリスト教は人間を抑圧するものか、解放するものか」、解放するものか、「人生の第二の転機」、「人生の意味」を加筆しています。これは神学書ではなく、トゥルニエ自身の信仰です。著者が力説したかった4章「キリスト教は人間を抑圧するものか、解放するものか」を先に読むこともお勧めします。

「宗教とは、神とその恩恵を情熱的に追求することを意

「イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。」

このみ言葉は、イエス様が行なわれた癒しの奇跡の一つです。しかし、この物語は、単純な奇跡ではなくて、キリスト者は何をする人なのか、どのような

日々の生活、どのような人生を送る者なのかについて伝えているお話でもあると思ひます。

それでは、イエス様はなぜ、先に指を耳に入れて、その後、舌に触れたのでしょうか。

その順番にはどんな意味があるのでしょうか。それは、聞くことを先にして、話すことは後にしなさいという意味ではないかと思ひます。つまり、話したり行動するためにはまず、聞くことをしなければならぬということではないでしょうか。それは「少し単純すぎる」と皆さんは思ひうかも知れませんが、これ

がまさにこの奇跡を通して、私たちに改めて伝えているイエス様の御心だと私は思ひます。

そうです、キリスト者は「聞く」人なのです。何より、神様の御声を聞く人なのです。しかし、神様のみ声は、耳が開かれている人だけが聞こえる声なのです。耳が開かれている人だけが、自分自身が誰なのか聞くことができます。私たち一人一人は皆、神様の姿で創造され、神様の愛によつて生かされる存在であることを感じます。そして、今もいろいろな苦しみと悲しみ、苦難と痛みにあつて

いる人々もすべて神様の物であることを分かるようになります。そうです。耳が開いている人こそが世の中に広く響いている神様の声を聞いて、感じることもできるのです。そして、その声を聞くことがそがまさに、神の宣教の始まりであり、自分自身と隣人を愛することの始まりなのです。それでは、今、私たちの耳は開いているのでしょうか。

「被災地リレーウォークを通じてフクシマを想う」

森田 信也

9月2日から9日まで延べ25名の方に参加いただき、東日本大震災に加えて原発事故に苦しむフクシマに行きました。旅の目的は、①歩いて津波による犠牲者に祈りを捧げる ②「いつしよに歩こうプロジェクト」の働きを知り、参加する ③苦しむフクシマそして聖公会の教会や信徒の皆さんと繋がることでした。

福島聖ステパノ教会をスタート、磯山聖ヨハネ教会の3人の信徒の方を含め、福島県最北の新地町から、相馬市、南相馬市南部、そして車で原発を迂回して郡山聖ペテロ聖パウロ教会へ。そして原発南側の楢葉町からいわき市の小名浜聖ペテロ教会まで沿岸10か所で祈りを捧げ、厳しい残暑の中で全体約60kmを参加者で歩き継ぎました。



福島県の被災地は、警戒区

域内の原発周辺地区、ほとんどの住民が避難し復興が進まない南相馬市南部や楢葉町、高線量に苦しむ飯館村などの山間部、除染が進む地区、そして福島市・郡山市など線量が高くとも一見日常生活が営まれている地域など複雑です。その中で、すでに避難した人、仕事や生活のために残らざるを得ない人、また住むことが当然と思う方も多くいます。しかし、「大震災は人々の絆をもたらししたが、原発は人々の関係を破壊した。」という言葉を実感しました。

今年、原発に反対する声明が教区そして管区総会でも出されました。その中で、私たちが将来にわたり苦しみが続くフクシマの方々とどのように繋がっていくのか、その必要性とともにその重さも実感した旅でした。（正義と平和協議会・人権委員会主催）

2012教区合同礼拝

9月22日（土・秋分の日）、香蘭女学校において、14時から大畑主教の司式で合同礼拝が行われた。今年は直前に日本聖公会の宣教協議会が開催されたため、いつものフェスティバルではなく、合同礼拝とし、聖餐式後、宣教協議会報告を行った。出席者は約450名であった。

大畑主教は説教の中で「私たちは、全知全能の神を信じ、イエスと共に歩もうとしているが、現実の世界では東日本大震災のような思いがけないことが起きる。何も信じられないような事態が起こり、なぜ、どうして、とその答を見出そうとする。私も正直その答の糸口さえ分からない。しかし私たちは、その答が見つかったから行動をするというものではない。状況を変えるために、まず一歩踏み出す必要がある。」と語り、続けて「イエスは生涯にわたって、『主の僕』としての道から引き離そうとする誘惑と戦ってき

た。最も信頼する弟子のペテロでさえ人間的な思いから、慈しみ深い神がイエスを十字架の道に進ませるはずはない、苦難を受けるはずがないと主張した。しかし、神は憐れみ深いからこそイエスを十字架の道に進ませ、すべての人が愛の中に生きるようにされた。私たちはいつもペテロ



のように『人の思い』に支配される危険をもっている。だからこそ、神は私たちを集め、互いに支え合い、祈り合う共同体を作った。聖餐によって力づけられ、神の計画の実現のため、私たちの共同体が成長し、日々イエスの十字架に励まされ喜びのうちに進んで

いきたい。」と結んだ。

休憩をはさみ、15時45分から行われた宣教協議会の報告会では、参加者が「清水シスターによる原発についての講演」「いつしよに歩こうプロジェクトからの報告」「基調講演」「バイブル・シェアリング」「植松主教の閉会礼拝の説教」「提言」「全体のまとめ」などの報告を行った。特に重要な「提言」は、①み言葉に聴き、伝えることへケリユグマ②世界、社会の必要に応え仕えることへディアコニア③世界の中で福音を具体的に証しすることへマルトウリア④祈り、礼拝することへレイトウルギア⑤主にある交わり、共同体となることへコイノニアの5つからなり、これらの5つの糸がより合わさって1本の強い綱となるという宣教の指針を示した。今後、各教会がこれをもとに具体的な取り組みを考えていくことが大切になるであろう。

全ての報告を終え、会は17時に終了した。（広報委員会）

ようこそ月島聖公会へ

私たちの教会〔2〕

月島聖公会は、下町教会グループの一つで、もんじゃ焼きで有名な月島にあり、有楽町線と大江戸線の月島駅から徒歩数分の便利な場所に立地しています。

歴史は古く、1900年に聖路加国際病院のR・トイスラー医師が佃島に診療所を開設し、これが基礎となりました。

1920年に月島に幼稚園が建てられ、ミス・ヘンテ宣教師による熱心な宣教と幼児教



育の活動が行われました。しかし先の大戦で中断を余儀なくされ、彼女は月島への愛と宣教への思いを胸に、後髪を引かれるように帰国しました。

戦後1954年に地元の人々の強い願いと協力により、月島聖ルカ保育園と教会が併設され、働きが再開されました。その後1960年に木造2

階建ての保育園牧師館が建設され、月島聖公会は保育園の一室を礼拝の場として使用し、主日礼拝を守ってきました。

しかし独自の聖堂がほしいという強い思いと、老朽化した保育園舎では園児の生命と安全を守るには無理があるという思いが重なり、聖堂と園舎の再建が話し合われ、教区はこれに呼応し、2007年からこの

ための特別委員会を設置、3年の歳月を経て計画が具体化さ



れました。

その結果、保育園は社会福祉法人になりましたが、キリスト教の理念に基づいた保育を行うことが認められ、多くの方々の温かいご支援により、1・2階は保育園、3階は聖堂と牧師館といった形で建物が完成、2011年3月5日に献堂式を迎えました。その感謝の気持ちを大切に、新しい歩みを始めました。主日礼拝出席者は倍増し、細々と行っていた日曜学校にも7家族が出席するようになりました。また福島から放射

「芝公園の窓から」①

前を走っていたタクシーに「腕よりも心で運転で 日本を元気に」というシールが貼ってあった。目の前に山積する業務遂行と新たな一歩を踏み出し始めた東京教区における宣教の青写真を描きながら宣教主事としての1年半があっという間に過ぎた。「今」が我々にとって一番大切な時期であると感じた時間だった。2011年2月大畑主教の着座、各委員会の諸活動、「東京教区の宣教を考える会」、「2012東京教区合同礼拝&宣教協議会報告会」など様々な機会を通して今後の教区の宣教方向について活発な議論が行われている。また2013年東京教区は創立90周年を迎える。これまでの神様による導きに感謝し、100周年に向けて我々が歩むべき方向について考える時期である。今こそ「腕も心も共に用いる奉仕で 教区を元気に」を心に留めながら、新たに生まれ変わろうとしている「東京教区」が主のみ旨にかなうものとなりますように「働き」、「お祈り」をささげたい。 宣教主事 司祭 卓 志雄（タク・ジウン）

《10月の奉献先から》

浅草日曜給食活動

日曜日の朝9時30分〜50分の配食時間帯に、1食を求めて教会にやって来る野宿生活者へお弁当（鶏五目炊込みご飯250gのパック詰め）を提供する活動で、開始して12年目になる。野宿生活者の自立支援活動ではないのだが、生き続けていく命をつなぐ1食になればとの思いである。

今年の配食1回平均

は452食（最少333、最多603）。昨1年間では495食で、2010年度をピークにやや減少傾向が見られる。

活動に要する物資・資金はすべて、個人・団体からいただく献米と献金

。1回分500食には米50kgほどが入用。具材などを含めると約3万7千円、1食約75円の計算。一方、ボランティアは教会・他教会・施設や一般から毎回20人以上は必



要。また炊出し支援には毎週約200食をA教会が、月1回約100食をS教会とT聖公会がそれぞれ。すべての面で支援を頂戴しながらの活動。

浅草繁華街から歩いて往復30分もある教会の立地環境のことを考えると、わずかな1食のために来る450人という数字は決して少ないものではないはずで、野宿を余儀なくされている人たち、その要

因を生んでいる社会、野宿生活者たちへの偏見、野宿生活者支援への行政の在り方など、いろいろ考えさせられる。ここ数年、寄せられていた近隣有志の人たちからの反

対の声も昨年6月以降、聞かれなくなった。近隣への配慮を欠かすことはないが、淡々と活動している昨今である。

浅草聖ヨハネ教会日曜給食活動運営委員 伊藤裕元

《11月の奉献先から》

障害者週間のため開かれた教会として

2012年4月に日本キリ



スト教協議会総幹事に着任しました網中彰子と申します。立教大学文学部キリスト教学科では奥石勇先生の授業を受け、関正勝先生のゼミに出席し、聖公会神学院で八木正言先生の卒業礼拝に出席させていただいたことがあり、日本聖公会には親しみがあります。祈り、お支え下さる日本聖公会皆様に心より感謝するとともに、主の祝福が豊かにありますようお祈りいたします。

今総会期の標語聖句は「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」（マルコ1章17）です。障害者週間にあつて誰もが自分の力のみで歩んでいるのではなく、キリストの憐みにより、人知れず守られ、導かれて、主に従

いつつ歩んでいることを信じます。

NCCは多様性の中的一致を求め、祈りの支えによって

歩んでいます。諸宗教の方々と協力する場があり、それぞれ心静かに大いなる存在と向き合う時間が大切にされています。

命の造り主なる神の御計画の内に生かされる幸いを思う時、何もかも自分で解決しようと頑張り過ぎて握りしめる、じゃんけんというところのグーではなく、自己中心の罪を主に手放す、パアの姿勢でありたいと願います。

ちょっと聖書、ときどきユーモア（三）

1. あくび

牧師「Aさん、今日、あなたは私の説教中、あくびばかりしていましたね」

信徒「すいません、先生、昨日遅くまで仕事をしていましたから」

牧師「いいんです。一言お礼を言おうと思ひましてね」

信徒「どうしてですか」

牧師「いや、説教中起きていたのは、あなただけでしたから」

2. 熱のこもった説教

信徒「先生、今日の十戒についての説教はすごく気合いがはいっていましたね」

牧師「そうかい」

信徒「特に『父と母をうやまえ』のところは熱がこもって、すごい迫力を感じました」

牧師「それはそうだよ、今日は珍しく子供たちが全員礼拝に出席していたからね」

更にチョコキ、主の復活の勝利ビクトリーのVサインとなります。障害者週間を迎え、教会の豊かな姿を再確認し、再臨の主を共に仰ぐ友として、あらゆる垣根を越えることが出来るよう聖霊の導きを祈りましょう。

日本キリスト教協議会

総幹事 網中彰子

※次号は12月23日発行予定